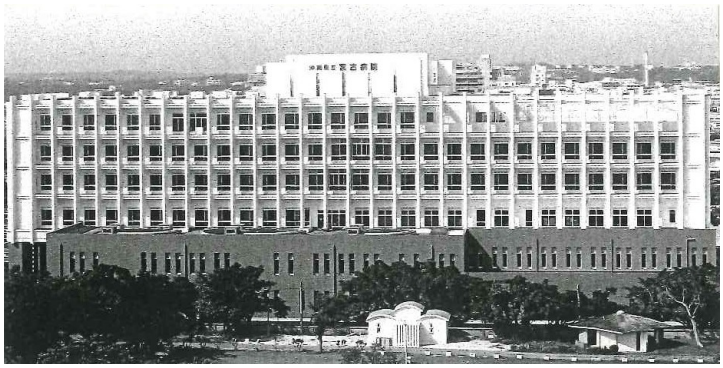
「宮古病院」設立への軌跡と地域医療

仲宗根　將二

本日の「宮古病院ができるまでの歴史から今を考える」は、医療部長の宮城雅也先生から指示された演題です。そこで県立宮古病院を宮古の医療全般に位置づけるために、このように「宮古病院設立への軌跡と地域医療」という形にしました。



医療に関わりもない身が、医療の専門家である皆さんに、医療の話をするのは釈迦に説法どころか、まったくのお門違いと思わぬでもありませんが、宮古地区医師会の要請で、多少とも『沖縄県宮古島医療史』に関わった立場からは、逃げられないなとの思いで、分不相応とは承知しつつもお引き受けした次第です。見当違いがありましたらお赦しください。

1　琉球王権と宮古

現代社会では、医療は人が生きていく上で、衣食住と同様に、人の暮らしに不可分に関わっている領域の一つであろうと考えています。それ故、演題にそって宮古の医療についてお話しする前に、その背景をなす歴史について少しおさらいをさせてください。

ご承知のように、中学・高校で学ぶ日本の歴史は、縄文時代・弥生式時代に始まって、古墳時代をへて、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代から江戸時代ときて、明治・大正・昭和と、近・現代へと発展してきています。ただし、これはあくまで本州・四国・九州を中心にした歴史的展開であり、強いていえば政治や文化の中心とみなされる京都や東京（江戸）等を中心にした歴史的展開であり、それぞれの地域はあまり見えてこないとも言えます。

奄美諸島と沖縄諸島は、縄文時代の終わりごろから弥生式文化の影響を受けながらも、地域性豊かな文化を展開しはじめます。沖縄本島は小王国の三山（中山・北山・南山）鼎立（ていりつ）から、一二六〇年「英祖」に始まって、一三五〇年「察度」が王位につき、一四二九年、尚巴志によって「中山」を中心に「琉球王国」が誕生します。この時期、大きさの違いこそあれ、日本列島に二つの王国があったと言っても過言ではないでしょう。

そのころの宮古は、八重山もそうですが、縄文時代、弥生

式時代とはまったく関わりのない、どちらかといえば南方色濃厚な文化であったようです。沖縄本島と宮古をへだてる三〇〇キロメートルの大海原を越えるのは、天文学や造船、航海術等の未発達な当時の、いわゆる有視界航海では、大変至難なわざだったのでしょう。そのような宮古・八重山が、沖縄本島以北の文化と関わっていくのは、およそ一二世紀以降とみなされています。一二世紀から、一五～一六世紀にかけて、密接な関わりを持ち始めています。せいぜい今から八〇〇年ほど前です。

現在宮古では一〇〇余りの遺跡が確認されていますが、そのうち数カ所を除いて、圧倒的多数はすべて一二世紀以降の遺跡です。出土物や言語等からみて、現在の宮古の私どもに関わるであろう人びとは、一二世紀以降、大方北からやってきたであろう人びとだということになりそうです。

一三九〇年、一四世紀末、宮古・八重山が沖縄本島の王権と初めて公的交渉を持つようになります。奄美諸島から、宮古・八重山までの現代につながる「琉球文化圏」形成の歩みが本格化してきたと言えるでしょう。のちに与那覇勢頭豊見親（トゥユミャ）（白川氏祖「恵源」）とよばれる人物によって初めて、琉球王権と交渉を持ったとみなされています。さらに一五〇〇年前後、仲宗根豊見親（忠導氏祖「玄雅」）によってしっかりと結びつけられていきます（与那覇勢頭豊見親はドクターゴン泰川恵吾医師の、仲宗根豊見親は大分県で開業している仲宗根玄吉医師の直系の先祖）。

2　琉球医療のあけぼの

一四世紀末、中山（琉球）王察度が左手を毒蛇に噛まれ爛（ただ）れてしまったために、臣下の申し出により、左手を切り継いだという（「琉球国由来記」一七一三年）。そのようなことが現実に可能かどうかはわかりませんが、琉球正史に登場する、いわば医療の始まるころに関わる記述です。

一五三四（嘉靖一三）年、来琉した中国の冊封使（さっぽうし）・陳侃（ちんかん）は、「国に医薬なきも、民も亦札せず、或は壮、或は老にして始めて痘疹生ず」（「使琉球録」）と記しています。琉球には医者はおらず、薬もないけれど、人びとは若死にしないで、壮年になり、あるいは老年になって、初めて天然痘にかかっている―といっているようです。

3　琉球医師の誕生

古琉球末期（一五〇〇年代末）、越前の人、山崎二休（守三、一五五三～一六三一）来琉、王臣となって厚遇され、御典薬に取り立てられる、葉姓を下賜され、子孫は医で身を立てる（「球陽」一七四五年～）。「古琉球」とは、薩摩に支配された一六〇九（慶長一四）年以前の時期で、それ以後は「近世琉球」と称されている。今の福井県の医師・山崎二休が、琉球は中国と交渉しているから、すぐれた中国の医師も往来して

いるであろうと師事するため来琉した。王府につかえて大切にされ、「系持ち」（葉姓「守」）になって、王付き医師となり、その子孫も代々医師として引き立てられたというものである。

一六一三（慶長一八）年には、薩摩藩は琉球王府の要請で、医師二人を毎年琉球に派遣するようになった。ほぼ四〇年後には、琉球にも薩摩医に劣らぬ医師が育っているとして、医師派遣を辞退している（東恩納寛惇「医方漫談」一九五四年）。

山崎二休の三男、休意（照屋守康、一六一一～六二）は、二六歳のとき、薩摩や京都で三年間医術修業をしている。三世休意（石原守方）、四世休達（内間守常）、五世休意（山崎守盈）ら、みな薩摩で修業した医師である。山崎二休の子孫であり、このように医師が輩出しているところから、琉球王府は薩摩医師の派遣を辞退したのであろう。

琉球王国として初めての史書「中山世鑑（一六五〇年）」を著した羽地朝秀はその攝政期（一六六六～一六七三）に、王府役人への登用要件として一二の「芸能」を奨励している。「学文・算勘・筆法・謠・医道・包丁、容職・馬乗・唐楽・筆道・茶道・立花」の一二（「羽地仕置」）。このうちのいずれか一つでも身につけていなければ王府役人に採用しないというお布令である。「医道」を芸能のうちに見なしているのはいささか気になるところだが、今風にいえば医術を身につけておれば国家公務員に採用するということであり、当然のことながら医師が重要視されていることを示すものであろう。

一七二二（康熙六一）年の「評定所布達」は、「士分百姓の差別なく内科外科灸治等について心得のある者は、遠慮なく診療に従って差し支えなく、成績次第では、無系の者でも士分に取り立てる」、但し「各自在所で開業、移転を禁ず」となっている。他への移住は認めないが、身分にへだてなく医師を志す者に希望を持たせる通達といえよう。

4　宮古出身医師の誕生

一六五九（順治一六）年、宮古から首里王府に対し「本島往古より医師有ることなく、而も百姓に疾病多し、伏して医者一員を請ふ」という要請があったので、斉姓三世中座筑登之親雲上完盛が宮古へ渡って生涯を終えている。―宮古は昔から医師はおらず、百姓に病気が多い。ぜひ医師を一人派遣してもらいたいとの要請があったので、医師中座筑登之親雲上完盛が宮古へ行き生涯診療に従事したという趣旨である。

一六六六（康熙五）年には、「宮古島始めて医術を学ぶ」とあって、「河充氏新里与人真喜と忠導氏下里仁屋の二人が上国して、典薬休伝に九年間医術を学んでいる」（球陽）。初の宮古出身医師の誕生といえよう。河充氏真喜（一六五五～九〇）は、川満大殿の後裔であり、中村貢医師の母方の先祖である。

銭持氏仲座仁屋は新里与人について医道を学んでいたが、与人死去後は上国して医師紹易に学んだ、それ以来宮古は医

道の絶えることはない（球陽）。仲座仁屋とは一七一七（康熙五六）年、白川氏一二世恵治平良大首里大屋子について上国し、医道を学んだ銭持氏仲座仁屋その人であろうか。中座筑登之親雲上について医術を学んでいた白川氏恵真（一六九〇～一七四六）は、一七三一年、三八年の二度にわたって上国し、さらに研鑽を深めている。

一七四一（乾隆六）年には、白川氏十三世恵通平良大首里大屋子が、染地氏川満尓也実勝、迎立氏仲宗根尓也完充、白川氏仲宗根尓也恵將の三人に医術を学ばせている。白川氏恵將（一七二二～六三）はさらに一七四四年、宮古詰医として赴任してきた久場筑登之親雲上について学び、一七五一年には再度上国して研鑽を深めている（「白川氏正統系図家譜」）。恵將は白川氏恵真の子である。

一七六八（乾隆三三）年、王府派遣検使・与世山親方は、島医者仲宗根筑登之が一かどの働きをしているので与人並みの待遇をせよ、伊良部村の百姓かめ国仲は詰医者について学び、さらに二度も上国して学んでおり、相応の取り扱いをせよなど、医術を志す者に希望を持たせる指示をしている。

5　「詰医者」を派遣

それでも医師は不足がちだったのであろうか。一七四四（乾隆九）年には、宮古・八重山の在番・頭らは連署して、王府に医師派遣を要請している。首里王府派遣「詰医者」制度の始まりである。三年交替単身赴任である。一八一〇（嘉慶一五）～一八五七（咸豊六）年には要請を入れて二人に増員し、一八七六（明治九）年まで、確認できるだけでも八一人の詰医者が宮古に派遣されている。

現北小学校の位置から西の信号灯のある十字路までの区間、西から東へ、在番仮屋（カイヤ）三棟、医者仮屋、学校所と、王府ゆかりの公的機関が並んでいた。一帯は漲水御嶽に隣接した行政庁「蔵元」とともに近世琉球における宮古統治の中核であり、近代以降、宮古支庁や警察署、裁判所、税務署、郵便局、村役場、刑務所、図書館、小学校など、官庁街が形成された背景である。

「仮屋」とは、那覇の薩摩在番に関連しての呼称のようで、出先機関の意である。医者仮屋は今風に言えば県病院宮古診療所といったところであろう。

6　疾病の流行

一七五三（乾隆一八）年～一八六七（同治七）年までの一一五年間に発生し、流行した疾病は、記録の上では、麻疹五回、疱瘡七回、熱病一回記録されている。麻疹はハシカ、疱瘡は天然痘だが、熱病がどのようなものか定かではない。一七七一年「大地震、大津波、死者二五四八人」、一八五二～五三年「大風、旱魃、大飢饉、死者三〇〇〇余」、一八五四年「熱病流行、死者六六〇余」という記録もある。台風、旱魃等は

現在同様例年のようにあったと予想されるが、なぜか二〜三回しか記録されていない。

疾病流行のつど、一〜二人、多いときは四人もの医師が王府から派遣され、詰医者と協力して治療に奔走している。

コレラは廃藩置県の落し子といえようか。一八七九（明治一二）年、明治政府は「琉球処分」（廃藩置県）を断行した。沖縄県の誕生である。王国中枢を中心に血判署名までして反対運動がおき、宮古では「サンシー事件」とよばれる反対側のリンチ、殺人事件までおきている。その取り調べの警官隊を那覇から運んだ大有丸の船長が宮古で発病、またたく間に宮古全域に蔓延し、多くの死者が出ている。この年、コレラは全国で一六万余罹患し、一〇万五〇〇〇余犠牲者が出ている（「医制百年史」）。

これまで（近世琉球）の医師はすべて漢方医であり、宮古に西洋医が入るのは廃藩置県以後である。一八八〇（明治一三）年、沖縄県宮古島役所（島庁→支庁）が開設されたとき医師が配置されている。一八八二（明治一五）年七月、時の県令（現知事）上杉茂憲が宮古巡視のさい、随行員が発病し受診している。これよりさき、同年五月、「下地武助・立津忠辰医学修学」のため上覇している（「宮古島役所沿革小誌」）。宮古出身で初めて西洋医学を学んだのはこの二人であろう。

7　西洋医の誕生

明治以降、宮古にも多くの著名な医師が誕生しているが、戦前期に限ってあえて特徴ある医師のみ三人挙げるとすれば、盛島明長、砂川正亮、亀川恵信ということになろうか。日ごろの診療のほか、さまざまな地域社会の活動に関わっている。盛島は宮古出身初の医学専門学校卒、砂川は初の医学博士、亀川は初の医学部出身である。

一　盛島明長（一八八〇〈明治一三〉一二・一二〜一九四一〈昭和一六〉三・二四）、六〇歳去。

下地・洲鎌で出生。一九〇二（明治三五）年、沖縄県師範学校本科卒業。二カ年郷校で教鞭をとったのち、一九〇八（明治四一）年、長崎医学専門学校卒業。宮古出身者として医学専門学校卒第一号。平良・西里で開業、診療の傍ら、宮古郡医師会長、沖縄県議会議員五期、議長。衆議院議員二期。大型製糖工場の誘致、宮古郡水産会の設立、県立宮古中学校（現宮古高校）の創立・宮古高等女学校の県立移管などに尽力。宮古郡織物組合長として、宮古上布の生産向上、販路拡大等にも力を尽くす。初の郡民葬。

一九六五年九月、有志によって宮古支庁構内に胸像建立、のち宮古神社境内、二〇一四年一一月、ゆかりある宮古高校敷地に移転している。胸像移転実行委員会長は下地常之医師がつとめている。洲鎌の生家跡に「生誕之地」碑がある。

二　砂川正亮（一八八八〈明治二一〉一・二〇～一九六七〈昭和四二〉一・二二）、七九歳去。

城辺・保良七又で出生。一九一〇（明治四三）年、島尻農学校卒、代用教員をへて、一九一三（大正二）年、鹿児島県立鹿屋農学校獣医科卒。宮内省下総御料牧場をへて、一九一七（大正六）年帰県、沖縄県畜産技手、糖業試験場、屠畜検査技手、警察獣医ののち、三四歳一念発起して、一九二五（大正一四）年、牛乳配達など苦労して東京医学専門学校を卒業。母校助手、順天堂病院、警視庁衛生技手、東京で開業後、一九二九（昭和四）年、奈良県警察部衛生課、学務部社会課。同県初のツベルクリン反応実施、結核予防に尽力。衛生課長・県立病院事務取り扱いで医学専門学校（現奈良医科大学）設立に尽力。一九四〇年、大阪帝国大学医学部から学位授与、宮古出身初の医学博士。一九四八年退職、同県で開業。七又公民館向かいに「生誕之地」碑がある。

娘トヨは一九三六（昭和一一）年、大阪女子高等医学専門学校を卒業した宮古出身初の女性医師、夫君恵進も医師、二人の男児も医師。

三　亀川恵信（一八九七〈明治三〇〉一〇・一八～一九六〇〈昭和三五〉七・一一）、六二歳去。

平良・下里で出生。一九一八（大正七）年、沖縄県師範学校本科卒業。島尻郡内小学校勤務をへて、一九一九年七月帰郷。この年宮古はコレラが大流行、多くの犠牲者が出て、医師志望の契機となる。一九二〇（大正九）年上京、小学校勤務ののち、一九二九（昭和四）年、北海道帝国大学予科、医学部卒。東京帝国大学医学部内科副手、栃木県太田原代田病院、北海道釧路市立病院内科をへて、一九三三年三月帰郷、西里で開業。一九四一年、四四歳で台北帝国大学医学部大学院入学、一九四四年三月、宮古出身二人めの医学博士。

戦後、帰郷後下里で開業、宮古郡医師会長。宮古医学会を設立して、歯科医師会、薬剤師会等と提携して定期的に研究発表会を催すなど、地域医療の発展に指導的役割を果たす。宮古育英会を設立して、薄資英才の育成に尽力。「宮古医学会誌」はじめ、孝子夫人協力のもと『随想録』『宮古先覚者の面影』、遺著『長寿の研究』など。敗戦直後、前里秀栄らと宮古社会党、宮古革新党結成に参画して、委員長。

8　過労の医師たち

俗に「医者の不養生」という言葉がある。実際にそうであろうか。

現在宮古には多くの医療機関があって、百人を超す医師たちが日々郡民の健康管理、疾病治療等に従事している。明治以降、昭和初期まで医師はせいぜい一〇人、もっとも多いと

きでも二〇人ていど。超多忙な診療活動にも関わらず、数少ない学識者ゆえ地域社会に請われるままにさまざまな社会活動に参画している。先の盛島明長や亀川恵信らにみられるように、きわめて多彩な活動ぶりである。不養生どころか、骨身を削って地域社会の求めるままに活動していたが故に命をちぢめられたのではなかろうか。

明治期までに生まれた宮古出身医師で、生涯の大方を宮古で診療に従事した医師一七人のうち一一人、六四％が六〇歳を待たず、せいぜい六〇歳そこらで他界している。次の医師たちである（生年順）。

宮国忠辰五四歳、勝連盛常四三歳、盛島明長六〇歳、砂川真章五四歳、仲松弥仁四七歳、砂川清四八歳、上里忠勝五五歳、西原雅一六二歳、亀川恵信六二歳、嵩原恵典五〇歳、与儀重豊三四歳（戦死）といったぐあいである。

なお砂川（真）医師は中村貢医師の母方の祖父、上里医師は山内秀子歯科医の父・朝秀医師の義父、平良賀計医師の義父、嵩原医師は伊志嶺亮医師の義父。

宮古の医療界も他地域と異なることなく医師のほか、歯科医師、薬剤師、助産師、看護師らが連携して日々その業に従事している。

9　医師以外の医療人

「歯科医師」の初出は、那覇の山城正忠。那覇で開業中の一九一八（大正七）年五月から一か月、渡嘉敷医院で出張診療に従事。与謝野鉄寛・晶子夫妻の明星社に所属し、歌人・書家としても著名、歌集「紙銭を焼く」（序文・序歌は晶子が記している）。渡嘉敷医院は現小林ストアーの地、のちの亀川医院、ついで中村医院。

山城と同年の七月と一二月、東京の弘中一郎が盛島医院で出張診療に従事。盛島医院は、現料理しきしまの地。

一九二五（大正一四）年、柴田米三がしきしまの向かいで開院。佐賀県出身の父が沖縄県職員として明治期来県し、首里で出生、八重山育ち。雄弁家で著名、平良町議から沖縄県議として多忙となり、一九三五（昭和一〇）年那覇へ転居。

その後を広島県出身の西村数人が引き継いだが、一九四三（昭和一八）年戦火激しく閉院、広島へ引き揚げている。

一九三一（昭和六）年には鹿児島県出身の篠原国彬が柴田歯科の西隣りで開院している。同年三月から九年一〇月まで宮古中学に在職した「無季句の旗手」と嘱望された篠原鳳作（国堅）の実兄。一九四三年一二月、戦争の激化にともない鹿児島へ引き揚げる。若き日の篠原歯科の技工師が戦後の一九五九年国家試験に合格した友利恵亮歯科医である。

昭和一〇年代半ばごろから宮古出身の歯科医が次々に登場する。宮古中学（一期）から京城歯科医専卒の池村恒正が一九四一年、砂川内科医院跡に、宮古中学（二期）から東京歯科医専卒の高嶺長二が一九四二年、現在地に、宮古中学（二

期）から日本歯科医専卒の友利清勝が一九四三年篠原歯科跡で開業している。さらに日本女子歯科医専卒の上里秀子、東洋女子歯科医専卒の宮国シズらが帰郷し開業している。上里歯科医は父上里忠勝の同仁医院での開業である。

「薬剤師」は、戦前期学業終えてその道に進み、広く知られているのは、下地恒喜、砂川玄俊、盛島明秀ら三人。下地（一九一三年生、城辺・下里添）は、県立二中から金沢大学薬学専門部卒。厚生省東京衛生試験所、山口県東亜酒精工業株式会社をへて、戦後帰郷、平良・西里の自宅で開業。平良市議一期。真喜屋浩医師夫人・恒代歯科医の父。中村貢医師の叔父。

砂川（一九一五年生、平良・下里）は、宮古中学（一期）から大阪薬学専門学校卒。北村化学研究所をへて、三共製薬入社、三共製薬研究所長、常務取締役、薬学博士。東京沖縄県人会・東京宮古郷友会役員として郷党育成にも尽力。

盛島（一九一八年生、下地・洲鎌）は、県立二中から徳島高等工業学校製薬化学科卒。東京森永薬品をへて宮古薬品入社、宮古中学で化学と数学を教授、のち平良・西里で開業。平良市議、立法院議員三期、県議二期、平良市長。盛島明長医師の甥。

「助産師」の初出は、沖縄県産婆養成所卒の神山静江。一九一九（大正八）年三月、糸満、台湾をへて、平良で開業。一九二八（昭和三）年、八重山の伊是名ツル（一八九八年生）が夫の転勤（宮古警察署）で転住し、一九六五年まで三八年間開業。下地盛子（一八九八年生、東仲宗根）は、大阪産婆学校卒。大阪、平良、台湾、平良で一九七〇年まで開業。

もっとも広く知られているのは下地シゲ（一九〇六年生、西里）。大阪回生病院産婆養成所卒。大阪、平良、台湾、平良で開業、およそ一万三〇〇〇人の出産に立ち会ったと伝えられている。

国仲十代（一九一四年生、下里）、新城トシ（一九一七年生、福里）、石垣しげ（一九二三年生、城辺）、山本キヨ（一九二二年生、城辺）、平良久子（一九一二年生、西里）らが、昭和初期、助産師の免許を取得している。新城トシは、新城日出郎医師の母。

「看護師」は大方見習いで、開業医宅に家族同様に住み込み、医師は正規の看護師同様にみなしていたという。戦前期、宮古で正看護師として唯一知られているのは、宮古南静園の阿部信子（山形県出身）。一九三五年五月～一九三八年一一月まで勤務、入園者から「聖母」のように慕われていたと伝えられている。

砂川トヨ（一九〇九年生、池間添）は、日赤台湾支部救護看護学校卒。台南陸軍病院から婦長養成所（東京）終了。戦後宮古に帰り、宮古慈善病院、宮古保健所をへて、一九五四年宮古南静園婦長、米国陸軍病院や国立清瀬療養所（東京）

で研修。一九七二年定年退職。

10　公的医療機関

一八七九（明治一二）年廃藩置県後、最初の公的医療機関は、翌八〇年七月開設の沖縄県医院宮古診療所である。のち宮古分局と改称し、九〇年五月閉鎖され、その後は嘱託医がおかれている。今風に言えば沖縄県病院宮古診療所であり、宮古初の西洋医の始まりでもある。

一九二七（昭和二）年二月、沖縄県宮古支庁内に宮古郡マラリア防遏所が開所されている。敗戦後の一九四五年一二月閉鎖され、代わって衛生課を新設して、衛生全般を担当している。課長は柴田朝雄医師、柴田歯科医の実兄。翌一九四六年四月には動員署跡（のちの博愛医院）に施療院が開設され、開業医の輪番制で貧困層の診療に当たっている。一九四七年六月、慈善病院に改組されて、専任の医師が複数で配置されている。

さらに下地、上野、多良間、西城、福嶺、伊良部に分院を置いて医師を配置し、診療を充実させている。一九五二（昭和二七）年四月、琉球政府創設で閉鎖され、宮古保健所が開所された。宮古福祉保健所の前身である。

公的医療機関の三つめは、一九三一（昭和六）三月、ハンセン病患者のための県立宮古保養院の開設である。所長は警察署長の兼任で、定員四〇人、最初の入所者は一四人。一九三三年一〇月、臨時国立療養所と改称し、初めて専任所長として医師が配置されている。その後定員は一〇〇人、二〇〇人と増員され、一九四一年七月、国立療養所宮古南静園と称し、定員三〇〇人。

一九四五年戦火激しく、職員は安全地帯へ避難して、取り残された入園者は自活を余儀なくされ、栄養失調とマラリア等のため一一〇人の犠牲者を出している。戦後、戦火で荒廃した施設の復旧は始まったものの専任園長（医師）は八年振り一九五三年六月に就任している。

四つめの公的医療機関は戦後の一九五〇（昭和二五）年一月、現在の県宮古事務所の位置、無電送信所跡に、宮古民政府立結核療養所が開所している。同年一一月、宮古群島政府立、一九五二年四月、琉球政府立宮古療養所と改称し、一九五七年九月、平良・東仲宗根に移転している。一九六〇年三月、琉球政府立宮古病院と改称して、開放性病院に生まれかわった。一九七二年五月、本土復帰にともない沖縄県立宮古病院と称し、二〇一三年六月、平良・下里に移転している。

一九五六（昭和三一）年七月、沖縄赤十字社宮古支部診療所が、平良・下里に開所している。一九六二年六月、近くに新築移転し、一九六六年二月には診療所に付設して、沖縄福祉病院宮古分院が開設されている。一九七二年五月、本土復

帰にともない日赤沖縄県支部に移管されたが、事実上の閉院で、一九七四年四月、宮古市町村会による「宮古救急センター」として生まれ変わった。一九七六年四月、宮古地区広域行政組合（のち宮古広域圏事務組合）、二〇〇五（平成一七）年一〇月、市町村合併で宮古島市に引き継がれたようだ。移転後の宮古病院に併設されている。

11　宮古の医療は一つ…

初めにもふれたように、本来宮古圏域の医療について話をする立場にはなく、またそのような力量も持ち合わせていない。代わって先輩方の言葉を紹介することで、その責めの一端を果たしたい。

開業医の先生方の大方は勤務医を経験しておられ、その組織体である一般社団法人・宮古地区医師会は当然のことながら、設立以来公的医療機関と連携して、宮古圏域の医療の充実、前進のために重要な役割を果たしておられる。それは歴代医師会長の言葉の端々からもうかがうことができよう。

宮里不二雄医師は常々「医療人の社会的責務・地域社会との連携」を言い、下地常之医師は「宮古の医療はひとつ」と言っておられる。宮古病院（安谷屋正明院長）の「地域と心をかよわせ共に歩む」という理念も同根であろう。『沖縄県宮古島医療史』の編集に関わった先生方―砂川恵栄・池村真・新城日出郎・岸本邦弘―医師らは、地域社会に求められるまに、医療以外のさまざまな分野でも活動された先輩医師たちを回顧して、機会あるごとに畏敬の念を込めて、「先輩方の志の高さ」を口にされていた。

これら三者に共通するのは、先輩医師たちの「宮古の医療はひとつ」であり、「医療人の社会的責務」として、地域社会に請われるままにあらゆる分野にわたって活動する、その「志の高さ」は、そのまま現役医師たちの姿であろうと受け止めている。地域医療の充実は、地域の人びとは当然のこと、旅行者をも安心させ、快適な思いを抱かせていることであろう。

宮古圏域の、医師をはじめ、すべての医療人の、医療はもとより、各分野におけるご活躍に心からの敬意を表するとともに、一層の充実、前進を期待するものである。

※「オトーリ」のこと

主催者は、「健康によくないオトーリについて」の見解も求めておられるので、蛇足ながらひとこと付言したい。

琉球弧の人びとにとって、神に祈りを捧げるのは古琉球以来の習俗であろう。旧平良市教育委員会の調査によれば、宮古全域に御嶽（拝所）が九〇〇余も確認されている。台風、旱魃、疫病…、人知の及ばぬ天災・地変に、為す術を持たぬ人びとは、事あるごとに常に神々にすがっていたのであろうことがうかがえる。

とりわけ近世琉球から近代初期における宮古は人頭税社会

である。税（主として穀物と織物）を納めたあとのわずかばかりの残りで、お酒をつくり、御嶽の神々にお供えしたのち、そのお下がりを参加者全員で廻しのみする。今と違い、テレビやラジオ、新聞、雑誌、映画、演劇、音楽、スポーツ…、何ひとつ娯楽のない時代の民衆にとって、唯一神と共にある安らぎの場であったことであろう。

それが近代化が進み、多少ともゆとりが出てくるにともなって、出産や家屋の新築など、各種宴会の場に反映し、現今のような「オトーリ」に変わってきたのであろう。

ただし、かつての神事における「酒」は、女性が口をすすいで「噛む酒→神酒→おミキ」であり、現在の蒸留酒とはまったく別ものである。アルコール度はきわめて低く、量も限られていたことであろう。酔いつぶれるようなことはなかったのではなかろうか。

〈付記〉本稿は、請われるままに二〇一五年二月二四日、県立宮古病院でおよそ九〇分話したさい、時間のつごうで割愛した資料を加え整理した概要で、同年四月五日から月一回、十一月まで七回地元紙に連載したものにさらに加筆したものです。「11　宮古の医療は一つ…」以外の大方は、宮古地区医師会『沖縄県宮古島医療史』を出典としています。

なお「医療史」当初の編集作業は、伊志嶺亮、宮里不二雄、下地常之、砂川明雄、砂川隆治ら五医師の担当で出発しています。その時以来、資料の収集・整理は、主として医師会事務局の職員（松尾優二・長間幸枝・渡真利恵子）らが担当しています。